番外書冊

和書門
類 一七二五八 號
二三〇 函
一〇 架
二三 冊

内閣文庫
和書 類
一七二五八 號
二三 冊
一五四 函
一 架

内閣文庫
番號 和 17258
冊數 23(8)
函號 15 4

154－0004(8)

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

武器考證卷六

江府　扈從隊士伊勢平藏貞丈輯

淺草文庫

書目

日本後紀
令義解
庭訓往來
異制庭訓
大鏡
增鏡
應永記
新猿樂記
和歌題林抄
尺素往來
南浦文集
拾芥抄
鎊抄

国立公文書館
National Archives of Japan

○日本後紀抜書　左大臣冬嗣公撰
自延暦十一年至天長十年

鞍橋禁 桓武紀 延暦十一歳七月戊午禁ス桑棗橋鞍橋ヲ但舊キハ者申シテ所司ニ焼テ印シテ用之ヲ ○古キニハ焼印ヲ押シ新シキヲ用サセマジキ為也

武藝 同紀 延暦十五歳三月庚戌令メ諸國ニ擧ゲ武藝秀ル衆ニ者ノヲ

歩射容儀師範 同紀 延暦廿五年十月中納言従三位紀勝長薨ス年五十三大納言正三位船守一男也歩射容儀為師範

節刀 延暦二十二歳三月庚辰遣唐大使葛野麻呂副使石河道益賜餞宴設之事一依漢法 中略 夏四月壬午遣唐大使従四位上藤原朝臣葛野麻呂副使従五位上石河朝臣道益等辞見即授節刀ヲ○此文ヲ以テ考ルニ節刀ヲ授ラル、コハ唯征罰ノミニ限ラズ外國へ使スル時ニモ節刀ヲ授ルナリ

節刀 延暦二十歳二月癸巳朔丙午征夷大將軍坂上田村麻呂賜節刀ヲ○是ハ陸奥國ノ蝦夷ヲ征罰ノ時節刀ヲ授ケ賜リシ也此外節刀ヲ授ラレシ事アリ今畧之

騎射 延暦十四年五月丁卯朔辛未御馬埒殿観ル騎射ヲ○延暦十七歳五月甲申御馬埒殿視馬射○騎射馬射同事也共ニ

観射

ウマユミト訓也右ノ外ニモ騎射馬射ノ事見タリ略之

烽燧 延暦十五歳九月己丑勅云云非常之備不可暫闕宜山城河内两國使𠁅置烽燧

角弓射 弘仁二歳春正月丙申朔壬子御豊樂院観射蕃客角弓

観射 右ニ見タリ此外ニモアリ畧之

射礼 天長二歳春正月乙巳朔辛酉勅曰射礼者國家大事不可以闕因遣右大臣於建礼門南庭閲六衛中賜禄有差

相撲 弘仁二歳秋七月己亥幸神泉苑観相撲 此外ニモアリ畧之

祈晴献白馬 天長六歳八月甲戌奉幣貴布禰社丹生河上雨師神副以白毛御馬為停雨也

○令義解抜書

令大宝元年淡海公不比等撰之又養老二年同人改之義解ハ天長年中左大臣清原夏野撰之是令ノ註也 令○如此丸ヲ加ルハ義解ノ文也

儀仗軍器 巻五宮衛令曰凡儀仗軍器○義解曰謂用之礼容為儀仗用之征伐為軍器即同實而殊号者也

軍器戎仗 右同令曰凡有献軍器戎仗等○義解曰謂弓箭刀矟之類為軍器也鼓吹幡鉦之類為戎仗也

騎兵隊歩兵隊 同巻軍防令曰凡兵士各為隊伍便弓馬者為騎兵隊餘為歩兵隊○義解曰謂五十人為隊也五人為伍也○又曰謂弓馬者歩射也馬者騎射也

歩射騎射 右義解ニ見タリ

十人為火

鉗ハ金ハサミ也令ノ抄ニ鍛工代手ニ者曰鉗

弦綫條

藺帽

兵士備器 右同令曰凡兵士毎火紺布幕一口著裏。銅盂小釜随得二口鍫一具剉碓一具斧一具小斧一具鑿一具鎌二張鉗一具毎五十人火鑽一具熟艾一斤手鋸一具毎人弓一張弓弦袋一口副弦二條征箭五十隻胡籙一具太刀一口刀子一枚礪石一枚藺帽一枚飯袋一口水甬一口塩甬一口脛巾一具鞋一两皆令自備不可闕少○義解曰謂紺布幕以下並皆私備也

弩

教習弓馬 用刀 弄槍 發弩 抛石 右同令曰凡衛士者中分一日上一日下謂無事者毎下日即令於當府教習弓馬用刀弄槍及發弩抛石

皆欲

擁印本作權非也
一本其字下有辞非也

○負 古本ニアリ

○義解曰謂弄者玩也槍者木両頭鋭者即戈之属也　義解曰謂拋者擲也作機械擲石撃敵者也

節刀　右同令曰凡大將出征皆授節刀不得及宿於家　○義解曰謂凡節者以旄牛尾為之使者所擁也今以刀劔代之故曰節刀雖名實相異其所用者一也

軍卒負數　右同令曰凡將帥出征兵滿一萬人以上　義解曰謂一万二千人以下何者満三千人得一軍之号故也　將軍一人副將軍二人軍監二人軍曹四人録事四人　義解曰謂軍曹者大主典也録事者少主典也　五千人以上　義解曰謂九千人以下也　減副將軍軍監各一人録事二人三千人以上　義解曰謂四千人以下也　減軍曹二人各為一軍毎惣三軍大將軍一人　義解曰謂一万人以上及五千人以上并三千人以上各為一軍故云三軍其三軍之官者大將軍一人將軍三人副將軍四人軍監四人軍曹十人録事八人

軍令　右同令曰凡大將軍（古本ニナシ）出征臨軍對寇大毅以下不從軍令及有稽違闕乏軍事死罪以下並聽大將斟酌專決　○義解曰謂凡閫外之事將軍制之欲有所指麾乃立其教令是為軍令其自非大將而諸將軍以下者不得復出令

勲簿　同勲状　右同令曰凡申勲簿皆具録陣別勲状勲人官位姓名左右廂相捉姓名人別所執器仗當團主帥本属官軍賊衆多少彼此傷殺之數及獲賊軍資器械辨戦時日月戦處並畫陣別戦圖仍於圖上具注副將軍以上姓名附簿申送太政官勲賞高下臨時聽勅　○左右廂トハ左右市ト云カ如シ義解ニ見　○團ハ軍團ニテ兵士ヲ集置所也

馬甲

○勲簿勲状トエフハ勲功ノ有様ヲ記シタル日記也高名帳ノ事ヲ云也

鼓角　同令曰凡軍團各置鼓二面大角二口小角四口通用兵士分番教習　○鼓ハ陣太鼓也角ハフエ也後世法螺貝ヲ吹クガ如シ

鼓　鉦　弩　矛　矟　具装　大角　小角　軍幡　纛幡　隊幡　右同令曰凡私家不得有鼓鉦弩矛矟具装大角小角及軍幡　○義解曰謂鼓者皮鼓也鉦者金鼓也所以靜喧也矛者二丈矛也矟者丈二尺矛也具装者馬甲也幡者旟旗惣名也將軍所載曰纛幡隊長所載曰隊幡兵士所載曰軍幡

城隍　右同令曰凡城隍崩頽者役兵士修理　○義解曰謂隍者城下坑也役兵士者役上番之兵士也

烽火　右同令曰凡置烽皆相去四十里若有山岡隔絶須逐便安置者但使得相照見不必要限四十里　○烽火ハヒノテヲ上ル也

火炬　松明　同令曰凡火炬乾葦作心葦上用乾草節縛處々周廻插肋松明並所須貯十具以上於舎下作架積著不得雨濕　○義解曰謂松明是松之有脂者也　○火炬ハタイマツ也

放烟　同令曰放烟貯備者須収艾藁生柴等相和放烟　○義解曰謂艾者蓬也藁者草之惣名也　○放烟ハノロシ也

應火筒 同令曰凡應火筒若向東應筒口西所若向西應筒口東所南北准此○又曰白日放烟夜放火先須看筒裏至實不錯然後相應（○此筒上詳ナラス）

軍團 卷一之下職員令曰軍團大毅一人掌檢校兵士充備戎具調習弓馬簡閲陣列事少毅二人掌同大毅主帳一人校尉五人旅帥十人隊正二十人 ○軍防令義解曰團聚也

挂甲 衣服令曰兵衛主師衛士會集等日加挂甲

金銀裝横刀 朝服 衛府督佐金銀裝横刀 ○右衣服令ノ文

烏裝横刀 衣服令曰 朝服 志以上烏裝横刀

軍器鐫銘 營繕令曰凡營造軍器皆須依樣令鐫題年月及工匠姓名（義解曰謂樣者形制法式也鐫者鑿也題者書也）若有不可鐫題（義解曰謂弓箭等之類）者不用此令

馬印 廐牧令曰凡在牧駒犢至二歲者毎年九月國司共牧長對以官字印印左髀上（義解曰謂股外為髀）犢印右髀上並印訖具録毛色齒歳為簿兩通一通留國為案一通附朝集使申太政官

馬醫 官位令曰馬醫師○職員令 左馬寮 曰馬醫二人

襖上著挂甲

貞丈云襖ハ武官着ル闕腋袍ナリ将衣ノ形武官ノ襖ニ似タル故ニ将襖ト云又後ニ将ノ字ヲ略シテ襖トノミ称スル故襖ノ説装束諸抄誤レリ

朱末額

頭巾 末額 襖 挂甲 裲襠 金銀裝横刀 烏裝横刀 脛巾 襪 烏皮履 草鞋 槍 緌 衫 腰帯

衣服令曰衛府督佐並皂羅頭巾位襖金銀裝腰帯金銀裝横刀白襪烏皮履其志以上並皂縵頭巾皂緌位襖烏油腰帯烏裝横刀白襪烏皮履會集等日（義解曰謂元日及聚集并蕃客宴會等也為志以上言也）加錦裲襠赤脛巾帯弓箭以鞋代履兵衛皂縵頭巾皂緌位襖烏油腰帯烏裝横刀帯槍以位襖代緋襖以鞋代履主帥（義解曰謂門部使部其正等者依衛士例）皂縵頭巾皂緌位襖烏油腰帯烏裝横刀白脛巾白襪烏皮履會集等日加挂甲帯弓箭以縹襖代位襖以鞋代履並朝廷公事即服之衛士皂縵頭巾桃染衫白布帯白脛巾草鞋横刀弓箭若槍會集等日加朱末額桂甲以皂衫代桃染衫朔日節日服之（義解曰朔日者四孟朔日也節日者初注會集日是也其主師以上注稱會集日者朔日節日同但衛士注言會集日者非是朔節日凡著朝服之時督佐牙笏志以上木笏此文不載者畧諸須知也）

横刀 槍 鞍 關市令曰凡出賣者勿為行濫（義解曰謂不牢不眞為行濫也）其横刀槍鞍（謂横刀者劔也槍戈屬也鞍者鞍橋也）漆器之屬者各令題鑿造者姓名（謂鑿也）○貞丈云鞍橋タ橋ノ字ヲ略シテ鞍トバカリモ云フ此文ニテ知ベシ

胸形箚　賦役令曰凡諸貢献物者器香藥彩色服食器用下略　義解曰器用者如下野甑胸形箚之類是也○胸形ハ筑前國ノ地名也和名抄ニ宗像

軍中禁女　軍防令曰凡征行者皆不得將婦女自隨○義解曰謂家女及婢亦不可得隨也○貞丈曰軍中ニ妻女婢妾ヲ相具スル事ヲ禁スルハ女ニ引レテ勇氣ヲ撓サン事ヲ恐レテ也又兵糧ヲ費シ財用ヲ耗ノ害アリ又軍中ニ遊女ヲ招テ敗ヲ取タル古例多シ佛者ノ所謂女人禁制トハ意味異也敵ニ美女ヲ與テ勝ヲ取タル例モアリ美女ヲ以テ間者トセハ其利ヲ得ル甚カルヘケレ共女ハ浅智ナル故實ヲ知ラセバ却テ我ガ害ト成ラン此間ヲ用ルニハ妙計有ベシ豫云難シ

一事　宮衛令曰凡儀仗軍器十事以上○義解曰謂「十事以上」此四字集解ニハナシ弓一張箭五十隻各為一事○五十隻ハ五十本也

○

庭訓往來抜書

玄惠法印作　元弘建武ノ比ノ僧

楊弓　雀小弓　笠懸　小串　草鹿　圓物　三三九手挾　八的

正月五日　楊弓雀小弓ノ勝負笠懸小串之會草鹿圓物三三九手夾八的等曲節近日打續經營之尋常ノ射手馳挽達者少々可誘引思食立候者本望也

○楊弓雀小弓ハ武器ニアラス弓ト云名ニ依テ是ヲ付記ス

百手　的矢　蟇目

正月六日　百手達者究竟之上手ニ可令同道也

但的矢蟇目等沙汰可入候

武藝相撲　伯樂　奈良刀　上総鞦　武藏鐙　佐渡沓　伊勢切付

卯月五日　絵師佛師捃繪物師武藝相撲之族或禪律僧

卯月十一日　烏丸烏帽子折室町伯樂奈良刀

右日條　上総鞦武藏鐙佐渡沓伊勢切付伊豫簾讃岐円座[illegible]檀紙播磨杉原

備前刀　甲斐駒

右日條　備前刀出雲鍬甲斐駒長門牛奥州金備中鐵

縵幕　幕串

五月九日　縵幕同幕串[illegible]端畳[illegible]縁差筵

着斉鐙　宿直腹巻

九月七日　着斉鐙宿直腹巻[illegible]助成[illegible]也

御縨御旗下賜

九月條　將軍家御教書[illegible]上下給御縨御旗等之[illegible]

戚外戚一族令九[illegible]者也

小櫻

紫糸威　萌黄糸威　卯花威　黒糸威鎧　赤革黄糸腹巻　唐綾威
黒革威　大荒目　筒丸　据縄目　緋糸威　腹當　星白冑　竜頭冑
四方白冑　同色袖　手益　腰宛　半首　涎懸　鍍袴

六月十一日 武具半隠見若殿以紫糸萌黄糸綴卯花威黒糸鎧赤革黄糸腹巻唐綾
小櫻黒革綴大荒目筒丸据縄目緋糸威腹當星白銘以四方白甲
各一領同色之袖并手益腰宛半首涎懸鍍袴

逆頬箙　胡簶　石打征矢　筋切符

右同条 逆頬箙胡簶石打之征矢筋
切符妻黒箆矢鏃鶉羽鶴本白等
○箆矢ハ野矢ノ誤ナルヘシ

尻籠　雁股　鋒矢　腰當

右同条 尻籠ニハ鷹羽雁俣就鷹羽鋒矢各相具
腰當ヲ　○腰當ハ箙胡簶等ノ腰當也箙ノ上帯ノ事也

本重藤弓　塗籠藤弓　糸裹弓　弦巻

右同条 弓者本重藤塗籠糸裹
等也加弦巻ヲ

兵庫鏁太刀　烏頸太刀　梁鐔　金作左右巻　長刀　手鉾

右同条 太刀者
兵庫鏁烏頸皆彫物梁鐔并金作左右巻白柄長刀同手鉾　○左右巻ハ鞘巻ナルカ

馬毛色

右同条 馬者連銭葦毛栗毛鳥黒鴾毛黒鴾毛廘毛糟毛
河原毛青鷺白月額蘆毛駮雪蹈等皆相副舎人飼口ヲ

黄覆輪鞍　螺鞍　白橋　黒漆鞍　張鞍料鞍橋

右同条 黄覆輪螺鞍白橋
黒漆張鞍料鞍橋

金地鐙　白磨鐙　大形鞦　細筋手綴腹帯　豹皮鞍覆　麞韋皮鞍覆
虎皮切付　鹿子切付　水豹泥障　熊皮泥障　鞭　差縄

右同条 金地鐙白磨
鐙大形鞦細筋手綴腹帯豹皮麞韋鞍覆虎皮鹿子切付水豹熊皮泥障
鞭差縄等為出陣之餞可進之

糒袋　行器　雨皮　敷皮　油單

右同条 兵粮八木糒袋行器野宿料
雨皮敷皮油單等雑具不及奔走之

腰刀　箙　胡簶　大星行騰　房鞦

七月五日 太刀長刀腰刀箙胡簶大星行騰
房鞦牛胸懸等雖非上品任注文求遠近被申下也

鎧直垂

八月十一日 後陣之武士警固之勇士色々甲冑鎧直垂馬鞍弓箙着重代
皇室用新調之美麗

帯刀役　御帯刀役　御調度懸　随兵

右同条 前後随兵番上下左右刀帯列
行御帯刀役人御調度懸人相並弓手妻手扈従之

健児所

三月七日 健児所者葦葺可支度也
○下学集ニ健児所中間之居處也

○

異制庭訓往來抜書

虎闢和尚作　元應元亨比之僧也
是書蓋玄惠庭訓之後所著乎

流鏑馬｜笠懸｜大追物｜草鹿｜圓物

大簇七日　弓箭之藝者馬上徒立矢流鏑馬・笠懸・犬追物・草鹿・圓物等者爲武藝之奥域也

相撲四十八手

右同条　又相撲有四十八之取手所謂入相撲・無相撲・踢相撲・内給外搦等也

四十八手盛衰記ニモ見タリ

兵法書

六月七日　兵法書雖多不過六韜三略呉子孫子司馬法

卯花威｜洗草威｜小櫻威｜縹色威｜緋糸威｜黒糸威｜黒革威

紫革威｜萌木糸威｜附子繩目｜紫下濃｜面高糸威

蕉夜十日　鎧百領并甲胄威毛者卯花威・洗革・小櫻威・縹色・緋糸威・黒線・黒革・紫革・萌木糸・附子繩目・紫下濃・面高糸威等也

推付｜胸板｜腋立｜草摺｜栴檀｜弦走｜甲顛穴｜正面｜吹返｜鑁形

劔首｜竹角

右同条　推付・胸板・腋立・草摺・栴檀・弦走・甲顛穴・正面・吹返・鑁形・劔首・竹角等一向遠古躰宗當世様

物具細工｜核調

右同条　石寄紀伊國湯淺乃至洛陽邊聞物具細工共自核調之為立並分理以碎心而結構也

薙太刀｜小反刃｜手矛

右同条　太刀百振刀百腰・薙太刀・小反刃・手矛等

百技進ゆ

【名劔】右同条　…泉太阿干将鏌鎁之劔、本朝ニ草薙村雲源氏髭切平家小烏抜丸餘五将軍之母子丸等比之更可謂差也　○母子丸ハ慕抓丸なり

【馬毛】右同条　馬百疋進ゆ本牧之…不可…疑也　戴星蹈雪栗毛糟毛…毛糟毛鴾毛連銭宿鴾毛黒駮青黒皆也

【名馬】右同条　周ハ…秦七駿蜀的盧楚烏騅漢烏孫本朝ニ厩戸王子甲斐黒駒太宰大貳弘継生竜…之更…下也

伴野鞍	那波鐙	豹皮上敷	虎皮切付	熊皮障泥	蒲韉	畝太鞦
廣形鞦	上総鞦	玉井轡				

右同条　伴野鞍…那波鐙…豹皮上敷…虎皮切付熊皮障泥…蒲韉畝太廣形上総鞦…玉井轡…食之…腹帯…頭…同進ゆ

【名鎧】右同条　凡源氏相傳鎧七…八…月数日数源太産衣膝丸薄金小袖等平家重代唐皮…雲比之更…勝劣

○大鏡抜書

藤原為業入道作

【相撲】巻一　五十九代 亭子院（宇多）　元慶八年甲辰四月十三日からいしものになりたまふ御歳十九王さぶらふなどきこえて殿上人にぞおはしましける…殿上のこいしはまへにておはしましける中将とすまひとらせたまひける…まこいしは折られけり…てかうらんにまえりそ…あおはいまも侍るなり　○こいしハ小倚子也けれ撲乃事續世繼にも見えたり

【一尺許ノ刀】同巻　六十五代 花山院　花山寺にまゐりしおりきておはしましけるに…源氏乃武者…たちそ…まいりける…一尺ばかりの刀…

【太刀ノ石突】巻三　太政大臣 忠平公（貞信公）　宣旨うけたまはりて…陣の…南殿御帳乃うしろの…たちいりつきて…むくくとおひうるものの…

そろしくおぼしけれど 下略

壷切太刀 同巻 左大臣 師尹 けさひの東宮には式部卿の宮をとこそはおぼしめす
へられ一条院のむかしくしきありしろさなりけれど東宮にたてまつらせたいをたて
まつるなりとおほせられしかどこれもおなじことなりとおぼしさためて
寛仁元年丁巳八月五日こそ八九歳にて三宮東宮にゐさせ給ひて同月
乃廿三日にこそ八坪切といふ太刀まゐらせたまへりまいりしか
たうだい御に伝はせ給ひしかばするかぎり東宮にもまいるべかりしを
えうつりきぬやありけんとかくさはりてこの年比うちおきこめどのよ
けしきぞかし

競馬 巻五 太政大臣伊尹 謙徳公 けうや院高院のむくらくらべむまある日ほどみはさぬきの
せんじあきまさの君ぞうちあひし一番には内かけし二番にはかくし
あどいひしかどその名こそおぼえはべらぬべきうちの津にみんをあしくう
ちさけてまけにあさりけるは 下略

水晶矢筈始 同巻 太政大臣兼通 天延二三廿六関白 閑院左大将あさう川と申しおほとのへていとし
かゝりしにおほえまてくちをしもたれたてまつり給ひしらひのわざ
などこそありけるにきつくめ花院ひきやなぞひのすひさう水晶れたすをけとあて
れたものよりもえいたくみへるなりおほみかりしれ給ふ幸にほうりまつりあへりしは

まとハ馬十 又的

このやうなぞひをはひめたりしはあさひのびかりにかゝやきてさるめでたき事やなき
侍らざりし いまはめずられねどめづらしくおすくへもおもひて侍るを
十列(トツラ) 巻六 栗田右大臣道兼 栗田殿の三郎 蔵人頭中将兼経の君きさき君祭日調(テウ)じ
給へりし車こそいとおかしかりしか檜(ヒ)網(アジロ)代といふものをもちて駒の形に
ちゐあやうりれまな車乃よこさまの毛と竹の形にえりてふみを
は矢の形にせられたりしさまの興ありしなり和泉式部乃君によま
れて侍りき 十列 と侍るなり車をまだ見ぬほどる

刀 巻七 太政大臣道長 はてむこまをうちせめくるあ中て立ちあひぬ ○コレハコカタナノコトヲ云

十列 同巻 道長大臣 大宮祀と申ききて祀のたびの日きさ月初子日とさる
めてとしに二度のまつりあれ又おかしくおはしやまりつゝはたりける京これ
この祀をみてくらう十列(トツラ)にてまゐりあふ

稜鞍 巻八 八幡臨時祭 頭中将あさくらうのあさむさみさくうはしきてる
るゝのよてれもするに院のたちよりしまいなりけりと見て車をもかちへかね
満そびしたちさるときていとものさはがし

○

増鏡抜書

一條冬良公作

【小弓】巻一（をとろのした） あるときは御すぐ（双）ろ（六）くなどいふまで思ひくだり
かちまけをはからふときあへるもいとをかしう御覧じて ○小弓ハ武器ニあらされ共弓と云ニ仍テ此所ニ付
【賭射】【同賭物】巻一（同上条） まうき殿上人召して出させられ御弓のひきく
ふいとみんあるそハさせ給へもあるときは御すぐろくなどいふまで思ひくだ（賭）
まけをはからふときあへるをいとをかしう御覧じてさ海しけうあるのり
物ともたぶでさせ給ふとて何かし此中将を法性寺の門院の御かたへな
めでてもさのこゑも給ふ事ハせぬへかうんのり物とゆされ御るふとりあへずち
いさきかなる御前乃かのもしたるがいとをかしう御るをまいらせられなりし御法
つかひ乃かへ人ならなかむといふかしくて加かしはのあけくみる小琴なり
いと見えずなりてぢとをかしうちあかみてまさ海しく申へる京しきさ志
る七条院浅からんしおこせそらからんそなげにかちおしくはありされうばう此奉
志かぬなやハあるいかへより殿上此のり物こそいふこと又はまれをこそかけ物又
せうかいまうけ物と思えろうまれなりをいさされ当るあんいかしへのおきりあへる
こそいてきさせられ思ひて乃給ふ ○後鳥羽院の御つくれしこと

【小弓】巻二（三神山） 将軍ハ大殿乃御子いまハ大納言殿とききこ御給ひし折ニハ永久又

常ニモ天子ホユドノ時ハ鳴弦アリ禁秘抄ニ見タリ

のおり堂をし泰時朝臣おり時房と一所にて小弓いさせさうまりなとして
ふとけうるわさとなりけるに

【鳴弦】巻三うち比の宮 中宮はいつしかたゞならずおはします 略中 十日のあけぼのより
そのけしきありしかば夜のうち堂ひさしぐ 略中 ひつじのくだりほどにすでにおこなりぬ。
あれほどそうと公相の大納言皇子誕生ぞやといとあざやかにのたまふ 略中 十二日三夜
乃きし御ゆの治ことさてもいとめでたし おゆどの事あれど清れうち五位
十人六位十人なかにひき弦うちきぬ左兵衛督胡臣左馬権佐きみさだ大内記なる
光などさんこんのことなる見おもての夜をきちて孝経の天子の章ぞよむ 寛元元年六月ナリ

【張綱】【移馬】巻三上 十二月一日ハ石清水の社に行幸あり 略中 左大将のいる出て前の
右大将の八もりつなにてうけれるを知らせきたるとぞ

【将箙】巻四けふりの末 宝治二年十月廿日ころをみちおらんじかとうちに行幸
しかに 略中 清府のかん堂ちめ八ちりきぬの随身にかりやかなひをきさせたり

【白御太刀】巻五 文永四年 そのとしなか月の比左のおとゞ近衛殿乃日此山にの一院新院
大宮院御幸あり世にめでたき御よそほひ 略中 院の御命にハ直衣皆具夜乃
御まもり白御太刀御馬二疋 下略 ○貞丈云太刀馬を礼物に用る事武家のことにあらず

【坂上宝剣】巻五あすか川 朝の御庸りとて田村の将軍より伝へけり 後サガ院ナリ
御太刀おりゃうしるしなどを御たまはりしきのゑみおもし渡しけるまゝや御かくれのうち后その内

裏へなしせ給ひし ○古今著聞ニ坂上宝剣ト云同物也

【白羽大鏑矢】巻六おとなしの弓あそ四年に成ぬ 略中 をきこし蒙古おこるときこえしにて
世のおうさはぎしうちぬ 略中 石清水の社にて大般若経供養法いみじくりける
御よ晴くる空に黒雲一村にはかに見えてかなりしか雲の中より大きなる
羽にてむきたるかぶらやの大きなる西をさして飛出くなるをとおぼえし
なりけれハかしこには大風の吹来て兵の見てまは吹えぬ浪おかへしたち
海のうへあさましくありてこなたの川にうけるとそなる我逃にて神のおります
しるしあらたなる事かぎりなし

【平胡簶】【華総剣】巻六上 ある八闕腋に平胡簶おとちしの袍に草総の
剣なとふくなり ○草総ハ草緒の写誤なるへし
緒ナルヘシ

【壷】巻六上 為道朝臣をともしの袍に壷おひて弓に懐紙をとりぐして
上達部の沓のうへをとりて階の間より入て文臺の上におく ○壷ト八壷胡簶也次将装束抄ヌ同之

負壷

甲斐源氏浅原八郎為頼好勇行兇

○本書篇目脱ス

【赤地錦鎧直垂】【緋威鎧】巻七正応三年 九日三月九日 右衛門の陣よりおそろしきものども
馬にのりながら三四人ばかりの九重の中へはせ入てうへにのぼりて女嬬
がつかたに乃きみてちしてたとひふなおとを見あけられたれば
けなるおとこの赤地の錦のひたゝれにひおどしの鎧きて
あら鬼のやうなるかほつきにてみるとハいふくるに出ぬるそとぞ
○此者アサハラト云者ナリ同八郎共来

鯰尾刀 右同条 このたびはいはたちにて坐つ孫なりする程に三条宰相中
将実まりもめしよられぬ三条の家につたはりてなまづをとかやいふなる
のありけるをその中将日比もてなされたりけるにそれあさからずおぼえいしとる
などいふめりごとをいぐきそ中院もきこしめしなどいふきこえあり
流鏑馬 巻七上日 八月十五日宮(ミヤコ)古の放生会まゐびそこなふよのありさまも
すこしかはめでたし将軍もまうでらる 中略 カマクラノ放生会ヲ云 法会のありさまも本社に
かはらず舞楽田楽師子からしらなんぶさあるさまく なほしつけたるやう
どもおもしろし十六日にを流鏑馬あり様なともいかめしく侍り
なくさみつくそれはまんはくなどひき 幔幕 上にたてたり
金作抱乃鞍 巻七上日 いとぬまれ判官とてそのうりきぬあそびのなるに金作
もれて鞍をきて随兵いかめしくめしくして ○久明親王将軍にありてかまくらへ下向の時の行粧ヲ云
銀太刀金鍔丸を磨 巻八 秋のみ山 正中元年といふやよひの廿日あまり石清水
の社に行幸し給ふ 中略 別当左兵衛督資明はしり下部とかやいふ物八人
坐ちはだかりたるほどのべたるにやとさるに鍔の丸をきぬ 黄(金へ) 見えきくる程の
もしうきらげなり
外苑威鎧 鍬形冑 萠黄腹巻 赤腹巻 褐衣下腹巻 萠縫細太刀 (衣ノ下ニ)
巻九むらそれ日は大納言を大塔の前は座主そうるふしきもおぼす腹すが

サスカノ名 弟我物語ニ見タリ

なほいでさせ給ふ卯花をどし乃鎧よくはぐさのかぶと たてまつりて大矢お
ひてわかれる妙法院の法印すこし此衣乃おもてにはえぎの法服巻ときやき
給へり大納言は如く此香染のうす物のかりぎぬに掲焉(ケチエン)にあかき
ちをまきをすりしてぬすりまにま紀家のほるそ太刀をそはきそひける (ウスモノヽ上ニスキトホルナリ)
さすが 衣本にえんそうり腰刀也 ○後ダイゴ天皇伯耆ヨリ都ヘカヘラセ玉ヒテノチニ又笠置エ入ラセタマフトキノ躰ヲ云
石弓 巻九上日 すでにあづま勢しとも雲霞のいきおひをたなびきのなる
よしきこゆれぞかさぎにをゆとじうおはし さちぐをゆよりいとけはしき
山のふもきはじらおほちをこえをいまじ次木戸逆木(サカモギ)石弓などいふことどもをこしら
ためける
関東 巻十 月草の花 関法ならるとかやいふことあき雷光なちかかる露のに地乃
そこあらく紀梵天乃宮の中もきてれとろき給ふらんと思ふもうりりかどよみあひ
うるさ騒ぎしうるゆくさ紀なれく物おもひゆる人もなし
唐赤地錦鎧直垂 巻十上日 大塔の法親王兄やこゝに入給ふこの月比は法
ぐしおろしてえをいまずきなむおなるれどこゝになり給へりかゝのあり地の
ふしきのおよろいあつまれといふものの坐て参りて法ちまかそて見ゆりおへ八
法ちまにゆをしけるかものふとももうちちこみて法門の法供なりしはそ
わすくもとるまじかなり

應永記抜書

記者不詳

冑ヲ下人ニきさせ

〇

白綾威腹巻｜金伏輪鞍 義弘入道（大内左京大夫）その日のいでたちにはあやおどしの
腹巻にとしころ秘蔵すると聞えける沛艾げのまに金ぷくりん
のくらおきてぞ乗りける冑をハわざと脱して下人にこれを持せけり

首を塩手に付る 遠江の国の住人が つまこ壹を深よせて犯
二人うちとりしびをむ鞍のしほでにつけられけることやと一所
にしせんとておかしところにきりいりてうちしにす

頬當 義弘けふをことさらしよ諸方の軍にも下知せんとすれ
に指のいひぬくが紀尾しとてわらあてをむせざりける

鎧之胸板 山名の入道左刀をもてあげすく若後におしかゝりへて侍ん
とかゝれ若後かきまかく長刀（ナギナタ）にてこみきれがよろひの
むないたをけさうしろへつき通ス 杦老後入道之大内家臣

矢合｜関声 十二月廿一日の卯の刻より寄手の勢を作り矢合して四方
同時にせめいる

楯板箙をたゝきて関ヲ作る 十一月廿九日のあかつきより押よせみるの
三万余騎楯の板ゑびらをたゝきて一度にときを作りけれハおびたゞしの

内ゐも五千よきたいこをうち鳴らしそをたゝきて鬨をぞ合ける

太鼓　櫓　掻楯　右は兵えうり

走櫓　おぢやうの四方をしのやぐらよりくろきやうけつよゆえの精兵さしつめひきつめさんぐみぞいたりける

井樓　櫓　材木を集め数百人の寄囲をまわして種々のたくみをさしせいろう四十八箇所一千七百余東西南北合て十六町のぎよまんぶくよくの陣をぞとりければ

○新猿樂記抜書　藤原明衡作　本朝文粋同撰

馳射　待的　照射　歩射　騎射　笠懸　流鏑馬

八的　三三九手挟

中君夫天下第一ノ武者也合戦夜討馳射待射照射歩射騎射笠懸流鏑馬八的三々九手挟等ノ上手也或被甲冑帯弓箭受干戈用太刀燿旌旗楯張陣従兵之計寔与天之道也于心猛毎縁合戦之庭常得勝利之名到于今昔之時未取属降之思具養由之弓能有鳥解之劔徳寔可謂一人当千不知姓名字元名勲藤次云々

備中刀　上総鞦　武蔵鐙　陸奥駒

常膽集諸國ノ土産貯甚豊也所謂阿波絹越前綿中略備中刀伊豫手筥又砥又鰯出雲筵讃岐圓座上総鞦武蔵鐙中略長門牛陸奥駒

○和歌題林抄抜書

一條禅閤兼良公御作

照射

照射(トモシ)　、ともしのまつ　、さつきやみ　、ほぐし　、さ月山　、しかのまちど　ともしといふはさ月やみのころ
さつきのほぐしといひて かゞりのやうなるものに ながきをとりてはし
てそれに松をつきてそまへ火をともしてるにのりてしげき麓山
の中をしのびてまちゆけば鹿の火はうけむかひをめづらしくおもひ
て人のありともしらでまもりゐて眼を矢をもげりいるかりうとお
とはさ月のかり人なりくきはにおほく ともしはあれども しかはめをあはせ
ざれどもまつよにはすこしめをあはせ給ふともほぐしの松もはてゝ
木の下やみにや眼どりんとも 鹿におもひはかり残らずていく夜あかし
はてんともよむべし

ともしするほぐしの松は夕露にしめりふもちすりかちくまてなき
やどもしよほのさ月の山にかりけれと鹿おもひそうけてこそいる
さ月山木の下やみにともす火は鹿のたちどのしるべなりけり。

彦間

下ノ戸七ノ戸
三ノ戸八ノ戸
伊郡ニアリ

○尺素往来抜書　一條禅閤兼良公御作

蠕蝍 は進退しがたき間蠕蝍共足進之は　○蠕蝍ハいかなる
ものと云虫也一名かまきりとも云痩馬の異名を蠕蝍と云ハいかなりけむ
よく痩たるを云也今も痩せたる人をたうろぎのやうしと云ハ蠕蝍の誤なり

多久佐里 大略何れも駒陸離に立御用に候間多久佐里しか牧あるに
足は　○多久佐里又田禪とも書也是牧の名也駒習合戦相語にあらく
乃あくさもとあり奥州乃牧の名也

須弥足井 須弥足井逸物肢爪地掻而替干馬候　○須弥足井
又須弥盥とも書也是も牧乃名也 牧ト八扁の多久佐里を合て云なり

馬毛并性 凡葦毛者雲雀毛木性也麻毛栗毛火性也霞毛駁
土性馬 鴾毛佐目皆色ハ金性也騮毛黒ハ水性也自奥州閉伊郡出来ス

馬序 二ヲ金 麻笛小方飛雀南方十内羽打 雀小雀殊に可為沽賞歟
は云為廣下二ツを廣 丈ヲ字有文字引あ丸ホ従以二足し蓄可播云
說し徒は大壛遠太彥間立廣下一方太御所し牧は別而ゆ為御
秘蔵乎　○金ハ市也鉄乃市を焼て馬の左の平股にあ付る也是を加印
と云也麻笛飛雀以下八下の文也あ市と云ハあ方に為し牧との志平なり

節村濃ハ節陰ノ事也

彦間 右之見ヘタリ彦間ハ牧の名也彦間立多久佐里立須涌足并立七戸立なとゝいふ立ハそだちと云事也生の字産の字なとを用へきであまりも云ふ須ゝ源で立の字又ハ舘の字をも用来れり常の須ゝあのゝちけなちと云ハるの立より出たる須あり彦間ハ所ゝの牧とあり彦間多久佐里須涌足井けこケ所の牧ハ良馬の出る牧出て云ふるを古ハ貴しける也

弓名品々 又ハ前弓ニ而形ニ作之作自然ニ而来梓弓檀弓槻弓石方竹と大弓三人張勁弓皆来荒木ゆく弓刪研須之節巻繁藤塗籠藤十所藤赤漆黒漆作り熊坂弦関弦都合百張

坂弦 **関弦** 右之見えあり

矢箟 **矢羽** 征矢白箟拭箟或節村濃或黒漆磨節ヲ若鷹大中黒鷲逆切符鵠霜降鷲本白鶴隼羽

山雉尾 **胡簶** **房** **靫** **鐵名物** 伊豫簶磨名誉之猿丸挟胡簶房靭等ニ

都合百腰

鎧腹巻名匠 鎧并腹巻ニ而石清和刋紀刋之紳工左近次及源内ホ示

調ニ云実ヲ亭和邪但人察荒示打

鎧威毛 云威毛卯花威小桜威鵯威火威示革威黄櫨匂裾濃目逆

蒭菜肩白裾濃或取妻或取腰ヲ并ニ綠種々ノ華也ニ而ナ唐綾綵緯

都合五十領 ○妻ハ安端也取ハいろどる也彩ノ字又紋ノ字也

冑 **鍬形** **髄當名匠** 冑ハ并ニ鍬形并ニ髄當ニ而大多

遣刀 **長刀** **太刀** **腰刀** **名匠** 遣刀長刀及太刀腰刀ニ而昔左月山天國雲洞以後得ニ而名ニ鍛冶除正ニ数百人於ニ而内信房鋼菜平定秀三条小鍛冶 宗近 後鳥羽院番鍛冶所作ニ以菊為銘菜田口林國吉光國綱来國行国俊木けやす成千ノ世院番ニ而けも留一文字進藤五 正宗 仲次郎五郎入道彼ホ三郎國宗彦四郎文殊四郎金剣兵衛一代ニ出来ニ而 ○遣刀ハ屋里也依之遣ノ字を作る欲柄長ニシテ遠くヽ鋒をやる故屋里と名付るべし初又ハ遣刀の字を用ひ後ニ鑓ノ字を作るべし太平記ニ康ニ鑓ノ字あり屋里の本名ハ鉾也

大追物 **行縢** **大星葵毛** **陰星秋二毛** 又於六條河原ニ而所ニ組大追物ハ所於御檢出見物可為最晴ハ射手并檢見注文大概ハ行行縢大星葵毛ホ之あハ并ニ陰星之秋二毛ハ衣ハ抱所ハ裘

臺廷尉ニ而熊皮尋常ニ半ハ欲

熊皮行縢 右之見えたり霜臺ハ弾正ノ唐名廷尉ハ撿非違使ノ唐名孫臣撿非違使ホハ装束ニ黒色を用る故行縢も熊皮を用る也

梅雲記
甲剣伴野村
東鑑巻六
信濃國
伴野庄

鞍鐙鞦名物 伴野鞍 那波鐙 長井鞦 玉井鞦不替之分ニ而不足候

笠懸 又於吉田之馬場可有笠懸候

十列 諸社依遊并奉幣神馬十列急速可被発遣也

御所的 五番五度弓 御所的ハ五番五度弓可為往古例候射手并弓太郎以下自兼日被定置人而本間武田小笠原未熟之可撰之也

可及之

市地 六地蔵堂出例企市地招喧嘩之者可及洛中鼓騒之条不可然候者也仍為警固備而之勢然ニ可申付遣

○南浦文集抜書

薩摩國住僧名ハ玄昌号南浦
慶長元和比人

鉄炮 巻上鐵炮記 代種子嶋久時公

隅州之南有一嶋去州一十八里名曰種子我祖世世居焉古来相傳嶋名種子者此嶋雖小其居民庶而且富譬如播種之下一種子而生生無窮是故名焉天文十二年也癸卯秋八月二十五日丁酉我西村小浦有一大船不知自何國来船客百餘人其形不類其語不通見者以為奇怪矣其中有大明儒生一人名五峯者今不詳其姓字時西村主宰有織部丞者頗解文字偶遇五峯以杖書於沙上云船中之客不知何國人也何其形之異哉五峯即書云此是西南蠻種之賈胡也粗雖知君臣之義未知禮貌之在其中是故其飲也杯飲而不杯其食也手食而不箸徒知嗜欲之愜其情不知文字之通其理也所謂賈胡到一處輙止此其種也以其所有易其所無而已非可怪者矣於是織部丞又書云此去十又三里有一津津名赤尾木我所由頼之宗子世世所居之地也津口有數千戸戸富家昌而南商北賈往還如織今雖繫船於此不若要津之深而且不漣之

愈也告之於我祖父恵時與老父時尭時尭即使扁艇數十挐之至於二十七日己亥入船於赤尾木之津丁斯之時津有忠首座者日州龍源之徒也欲聞法花一乘之妙寓止津口終改禪為法華之徒號曰住乘院殆通經書揮筆敏捷偶遇五峯以文字通言語五峯亦以為知己之在異邦也所謂同聲相應同氣相求者也賈胡之長有二人一曰牟良叔舍一曰喜利志多佗孟太手携一物長二三尺其為體也中通外直以重為質其中雖常通其底要密塞其傍有一穴通火之路也形象無物之可比倫也其為用也入妙藥於其中添以小團鉛先置一小白於岸畔親手一物修其身眇其目而自其一穴放火則莫不立中矣其發也如掣電之光其鳴也如驚雷之轟聞者莫不掩其耳矣置一小白者如射者之棲鵠於侯中之比也此物一發而銀山可摧鐵壁可穿姦宄之為仇於人之國者觸之則立喪其䰟況於麋鹿之禍於苗稼者乎其用於世者不可勝數矣時尭見之以為希世之珍矣始不知其何名亦不詳其為何用既而人名為鐵炮者不知明人之所名乎抑不知我一嶋者之所名乎一日時尭重譯謂二

人蠻種曰我非能之願學焉蠻種亦重譯答曰君若欲學之我亦罄其蘊奥以告焉時尭曰蘊奥可得聞乎蠻種曰在正心與眇目而已時尭曰正心者先聖之所以教人而我之所以學之也大凡天下之理不從事於斯動靜云為自不能無差矣公之所謂正心豈復有異乎眇目者其明不足以燭遠如之何而眇其目乎蠻種答曰夫物要守約守約者以博見為未至矣眇目者非見之不明欲守其約以致遠也君其察之時尭喜曰老子之所謂見小曰明其斯謂歟是歳重九之節日在辛亥涓取良辰試入妙藥與小團鉛於其中置一小白於百歩之外放之火則其殆庶幾乎時人始而驚而恐而畏之終而翕然亦曰願學時尭不言其價之高而難及而求蠻種之二鐵炮以為家珍矣其妙藥之擣篩和合之法令小臣篠川小四郎學之時尭朝磨久淬勤而不已嚮之殆庶者於是百發百中無一失者矣於此之時紀州根來寺有杉坊某公者不遠千里欲求我鐵炮時尭感人之求之深也其心解之曰昔者徐君好季札劍徐君雖口弗敢言季札心已知之終解寶劍吾嶋雖褊小何敢愛一物且復我不求

貞丈云
島津家臣
丹生恒好談
云鹿児嶋下ノ
士ノ家ニ種子
嶋製ノ鉄炮
ヲ持傳タル者
アリ筒ノ底子
ヂヲラズ張リ
塞キタル者ア
リト是イマタ
子チノ製ヲ得
ズシテ作タル也

自得喜而不寐十襲秘之而況求而不得豈復快於心歟我
之所好亦人之所好也我豈敢獨私於己而韞匱而藏諸即
遣津田監物丞持以贈其一於杉坊矣且使之知妙藥之法
與放火之道也時堯把玩之餘使鐵匠數人熟視其形象月
鍛季錬新欲製之其形制頗雖似之不知其底之所以塞之
其翌年蠻種賈胡復來於我嶋熊野一浦浦名熊野者亦小
盧山小天竺之比也賈胡之中幸有一人鐵匠時堯以為天
之所授即使金兵衛尉清定者學其底之所塞漸經時月知
其巻而藏之於是歳餘而新製數十之鐵炮然後製造其臺
形制與其飾之如鍵鑰者時堯之意不在其臺與其飾在乎
可用之於行軍之時也於是乎家臣之在遐邇者視而效之百
發百中者亦不知其幾多矣其後和泉之有橘屋又三郎者
商客之徒也寓止我嶋者一二年而學鐵炮者殆熟矣帰旋
之後人皆不名而呼曰鐵炮又矣然後畿内之近邦皆傳而
習之非翅畿内關西之得而學之而已關東亦然我嘗聞之
於故老天文壬寅癸卯之交新貢之三大船將南遊大明國
於是畿内以西富家子弟進為商客者殆乎千人檝師篙師

之操舟如神者數百人艤船於我小嶋既而待天之時解纜
齊梲望洋向若不幸而狂風掀海怒濤捲雪坤軸亦欲折吁
時耶命耶一貢船檣傾檝摧化烏有去二貢船漸而達於大
明國寧波府三貢船不得乘而回我小嶋翌年再解其纜遂
南遊之志飽載海貨蠻珍將歸我朝大洋之中黑風忽起不
知西東船遂飄蕩達於東海道伊豆州州人掠取其貨商客
亦失其所船中有我僕臣松下五郎三郎者手携鐵炮既發
而莫不中其鵠矣州人見而奇之窺伺倣慕有多學之者矣
自茲以降關東八州暨率土之濱莫不傳而習之今夫此物
行乎我朝也蓋六十有餘年矣鶴髮之猶有明記之者矣是
知嚮之蠻種二鐵我時堯求之學之一發而聳動於扶桑六
十州且復使鐵匠知製之之道而偏於五畿七道然則鐵炮
之權輿於我種子嶋也明矣昔採一種子之生生無窮之義
名我嶋者今以為符其讖矣古曰先德有善不能昭昭於世
者後世之過也因而書之

貞丈按鉄炮ヲ西土ニテハ鳥銃ト云武備志ヲ見ルニ凡
火器ノ類ヲ皆号シテ某炮ト云フ者多シ然ハ明ノ五峯

鳥炮ト名付タル歟鳥炮ヲ彼國ノ音ニテテ゚ウバ゚ウト云
レヲ其詞ニ付テ鉄炮ノ字ヲ充タルナラン歟鳥銃ト云
ハ飛鳥ヲモ射落ツヘキノ義也ト云或云鉄炮ノ二字會
典ニ見タリト

○

拾芥抄抜書

一東山左府實凞公記

黒地鞍　連著鞦　泥障　竹豹切付　豹切付　虎切付　过総鞦

葦鹿切付　沃懸地鞍　巻中末。乘馬鞍(幸行)公卿以下五位已上黒地鞍
螺鈿 蒔繪 無　連著鞦不差泥障三位以上竹豹切付四位豹五位虎过総鞦
六位葦鹿(脱字)鞦鞍負佐大夫尉(沃懸地)

牛馬印　巻下末。馬牛印廣一寸五分以下(弘仁格 兵下)

鹿吉日　同巻。鹿吉日(甲子 庚子 直滿平成吉 癸卯)

治刀鎧良日　同巻。兵仗日治刀鎧良日壬子 壬寅 癸卯 癸巳壬申
戊戌 己丑 己子　戊申 。忌日ハ甲乙庚辛辰午酉亥及戊日丙不買鎧

牧名　巻中。柏前○真衣野○穂坂(甲斐 已上)○石川○田比○立
野○小野○秩父(武藏歟)(已上)○山鹿○塩原○岡屋○平井手○
笠原○高位○宮處○垣原○大野○大屋○猪鹿○萩倉
○新沼○長倉○塩野○望月(モチヅキ)(信濃 已上)○利處○有馬○沼尾
○群志○久野○市代○大監○塩山○新屋(上野 已上)

餝馬　巻中末。還立日齋王車所所使(不乗餝馬各乗引馬 手振 取物笠等微微先行)

餝抄抜書

土御門大納言通方卿記
後鳥羽土御門順徳後堀川帝比

餝劔 四節會大甞御禊賀茂祭使節用此劔○古物餝劔大略木也云云

如法餝劔 如法ノ餝劔御禊行幸節下大臣帯之云云

餝劔裝束華 餝劔裝束革多赤滑而建久三正一院ノ拜礼ニ有藍革裝束并青華滑等云云嘉禎元十二十九御佛名ノ次或公卿有紫滑裝束云云

餝劔代 近代多用レ代ヲ

螺鈿劔 任大臣立后節會行幸列レ見ニ定考元三等ニ出仕ノ公卿用之或無止事拜賀等卿相用此劔雲客節會外不用欤元三二三日用之卿相ノ事云云少納言ハ省輔列見定考行幸節會等之時帯之

又下ニモ見タリ
樋螺鈿劔 相撲節出居將帯之事保元三七或秘記曰出居將等皆劔胘螺鈿劔或樋 拜賀用此劔事中略保延二十二十三宇治左府于時内大臣慶申金作堀物蒔繪螺鈿劔有レ樋

蒔繪螺鈿劔 拜賀用此劔事中略久安五八廿五三位中將兼長慶申或秘記曰金作劔蒔繪螺鈿平緒紫綾帯有文玉仁平三十二廿七中納言中將兼長慶申蒔繪螺鈿ノ劔有文帯○著座用此劔事保延四寸一廿二宇治左府著座蒔繪螺鈿ノ劔摺鸚鵡ニ有文帯

人車記云海部浦蒔繪野劔騏驎螺鈿文

蒔繪劔 蒔繪卿相雲客帯劔之人多用之但可帯蒔繪之公事雖有通用螺鈿之例可帯螺鈿之公事無帯蒔繪之例

海部白蒔劔（蒔繪劔系） 余家賀劔在前内府許其平親王劔云云海部白蒔子孫始拜賀之時借用之也

葦手劔 葦手劔執柄家被用吉事寛徳二二十二土御曰從殿賜葦手劔平緒二筋明後日侍從拜賀料也保延二十二宇治丞相参結政蒔繪劔（葦手銀作御堂御物云云 兼宣旨日所帯之繪イ）保安四三十一新関白令賜随身之後申慶射懸地蒔繪細劔残葦手也 ○射當作沃

銀樋劔 有樋劔事仁安二正賭弓右大將銀樋劔（今案老少或用之）

瑠璃柄劔 保安四三廿九臨時祭摂政金作樋劔蒔唐草瑠璃柄也

沃懸地劔 宿老之人撿非違使別當等用之但中院大理問答抄蒔繪沃懸地共有加點彼是可用也但用遠文蒔繪云云

蒔繪劔樣々 嘉禎元十二十九御佛名次或公卿語曰京極大殿常被帯有黒樋劔付劔銀細樋上下渡之中黒地薄蒔繪處々唐草上下沃懸地云云樋寄上方慶之時古人不執蒔繪劔云云

川樋劔 称川樋劔者樋中畫種々繪其上伏氷精瑠璃云云

野劔 蒔繪野劔 末地野劔 螺鈿野劔 蒔繪螺鈿野劔 尻鞘

近衛次將外衛佐等常令持之（東帯出仕之時相具笏）卒尓随役之時多用此劔也或宿老公卿高位之人常令持之或付護公卿將遠所行幸之時著蒔繪螺鈿野劔木地次將行幸之時多用之而近代次將或用蒔繪螺鈿野劔云云且御禊嘉禎弁少將（實雄入道相國末子）用蒔繪螺鈿云云定有其例欤可尋 ○宿老次將騎馬之時宿衣又雖著束帯用葦緒野劔不具随身或具随身常事也修正御幸多如此遠所使節之時入尻鞘也

野劔付護 **葦緒野劔** 右ニ見タリ（葦緒野劔ノ野ノ字ハ之ノ字トナスヘシ葦緒之劔ハ即チ野劔ノ事ナリ）

保延四二廿四日内裏焼亡自在三條行幸白川殿予帯野劔（葦緒 鮫柄）蒔繪

細劔 仁安二九十五殿記曰参花山院被仰曰日吉御幸試樂來月廿一日劔腋（或帯野劔或細劔）

野劔（小狐） 仁平三十二廿八中納言中將兼長直衣始出衣用野劔（小狐）把笏慶賀久壽元十一廿五中納言中將師長直衣始出衣帯野劔（小狐）把笏

尻鞘 竹豹尻鞘 虎皮尻鞘 細尻鞘 水豹尻鞘 仁安二九十五殿記曰参花山院仰曰尻鞘事舞人之時竹豹皮不鏁之由故法性寺殿被仰云々可用虎皮也廿日参殿（久我）申兼雜事之次申曰舞人之時可入虎皮尻鞘之由内府被命否如何被仰曰必不入虎皮竹豹モ入也予勤仕舞人之時故播磨入道尻鞘ヲ借用是竹豹也雖然虎皮又神妙也仁安二十一廿一賀茂臨時祭

白鮫
黒鮫

同三石清水臨時祭舞人之時故殿用竹豹尻鞘給也同四二十二殿記曰四位用豹皮五位用虎皮云云○細尻鞘事或書曰布衣騎馬殊刷時御幸已下執柄宇治供奉若親姓之人如公卿勅使相伴時帯野劔或虎皮細尻鞘○諒闇劔尻鞘事保元元或秘記曰水豹尻鞘無文青華装束左右衛門權佐惟方 頼憲 尻鞘虎皮

樋螺鈿劔 樋螺鈿者普通之様蒔繪樋中ニ摺貝也或説称樋螺鈿者有樋螺鈿劔也云云此事不得其意蒔繪樋事依有螺鈿通用也螺鈿有樋者何有通用之詮哉如何先年隱岐院御逆修御法事日予為三位中將用樋螺鈿劔（樋ニ景菱ヲ摺 樋普通劔ヨリハ廣 嚴重ニ見也）入道相國帯螺鈿之由傍難云云其時上皇仰曰樋螺鈿劔通用物也云云仍人々閉口之由後日聞之

薄塵地劔 心喪服用此劔云云兼保元十廿六土御曰著心喪服（上東門院）御服也 帯薄塵地無文紫華装束緋地無文平絹

黒漆劔 諒闇帯之金具等抜替吉服劔具也装束無文紫或藍草云云劔柄白佐女如常重服同黒鞘金物黒漆白華装束黒佐女云云保元二十一廿八中山曰劔柄黒佐女鞘黒漆金物黒漆白華装束柄金物等塗墨用之督殿如此

引 蒔繪可隨箙欤各別又不可有難或摺貝云云彇銀掘物或塗物（其文隨蒔繪）

御綾
奥綾
水精鎬
牛角鎬
角 倭名抄云和名沼太
霞尾羽
矢ニ真樺ト云ハ糸ヲ巻ナリ

取柄（有伏組）錦或御綾 取柄上下巻組（赤或紫） 樺（宿老人用白檀紙并色紙壮年之人用紅檀紙若薄様隨年老少有色浅深）或用真樺建暦御禊中將資平用之（其色紅梅色也）件度少將為家用青薄様後日及沙汰無所據之由上皇被語仰也中院大理問答抄真樺共有加點弭上下藤加點鹿角加點弓上下彇銀掘物（中院大理物具問答鐵散物有加點巻組緋糸云云）

箭 箆黒漆細能見也上差有水精鎬中院大理物具問答抄鎬牛角二筋之曰有御加點 **筈** 皆水精中院大理物具問答抄牛角有御加點○諒闇箭波須事保元元或秘記曰角波須 **羽** 大將已下次將切生中院大理物具問答抄曰切生摺尾有御加點○諒闇箭羽事保元或秘記曰所存霞尾羽 **樺** 真樺白檀紙色紙壮年之人紅梅（隨年有浅深）或薄様建暦御禊夏中將資平（用真樺紅梅色也）少將為家用青薄様後日及沙汰上皇仰曰無所據云云凡與弓無各別之儀中院大理物具問答抄曰白樺有加點 **矢尻** 金銅上差加利末多中院大理物具問答抄鐵散物共有加點

箙 打任テ所用公卿蒔繪或螺鈿非參議次將木地螺鈿而近代多用木地蒔繪無伏輪大將用之宿老之儀也中院大理問答抄曰沃懸地蒔繪两様注之但沃掛地ニ有加點○諒闇箙或秘記曰黒漆箙無文青草装束箭多波祢以鈍色絹押之（普通押錦之所也） **箭多波祢** 右ニ見タリ **隙塞** 隙塞薄様薄様隨老少可有用意打任テハ紅神妙物也大理曰色紙若檀紙云云

後緒 簇ノ後緒ナリ 後緒籃葦紫葦共用之打任テハ紫葦用之押ニ蝶小鳥ノ貝ヲ吹返錦皮用爐緂平緒之時飾装束爐皮者簇ノ後緒同爐皮云云頗不知其故右府説也

表帯 簇之上帯也 表帯公卿蘋芳緂次將蘋芳青相交緂春紅梅地文青 夏青地文紫 秋黄地文靖 好事之人如此用常ハ蘋芳青相交緂也有水精露或瑠璃有䕃 宿老之人無露云云中院問答抄曰蘋芳緂無露有加點引表帯事諸人所知遠所日吉春日等類也 行幸引之間仁平二正三或秘記曰朝覲小六條院隆長依為五位結表帯云云ミ方案壯年五位次將引表帯張弓也引表帯之時或結箭或結簇ノ上ヲ師鈎片鈎有兩説云云

淺沓 禁色之人沓敷用織物 表袴之切云云但堅文浮文可随人也 不然人用平絹皆押文為不混属也但大臣若大將不押之不混属故也執柄家凡不押之也

深沓 政若深雪深雨之時用之無華旋有縁無文紫皮

半靴 直衣冠布衣騎馬之時用之華氈錦斗如靴沓

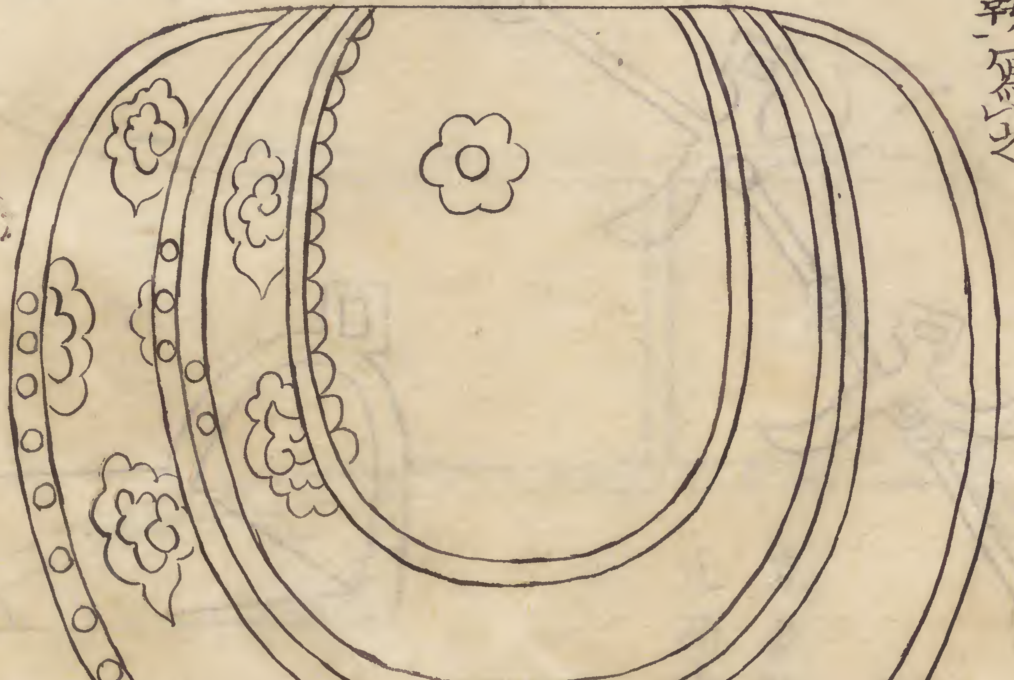
毛沓 或古老抄曰布衣騎馬殊刷時毛沓有帯如靴帯ミ方案公卿勅使始終扈從之人可用也

唐鞍 橋 黒地螺鈿入玉 表敷 錦 大滑 有金銅金物 鈴等

旋當作氈

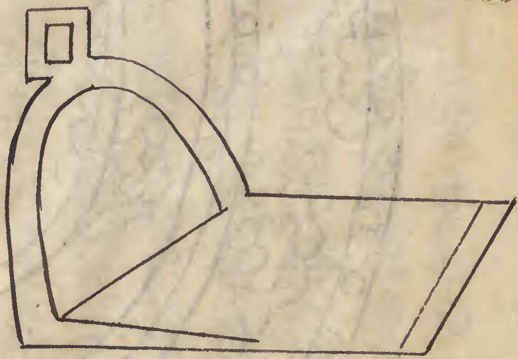
借請德大寺ノ唐鞍ヲ寫ス之

〇大滑 三重有伏輪二重付透金物端三十二次端二十六鞍敷下緋地錦伏輪上有菱針等多見之必不一様或付藤丸金物或花橋有鈴等而此鞍大滑無鈴



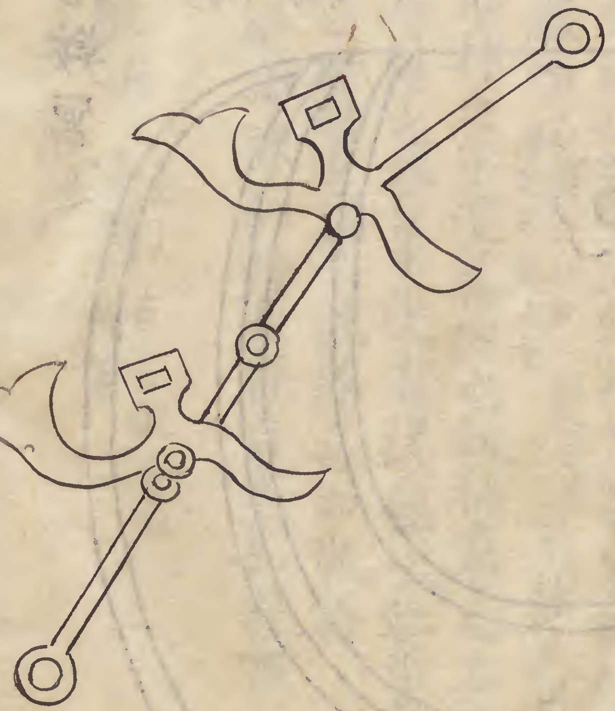
○鐙

古唐鞍等多者
無舌只輪計也
而近代爲蹈能
所爲尤可然也



○轡

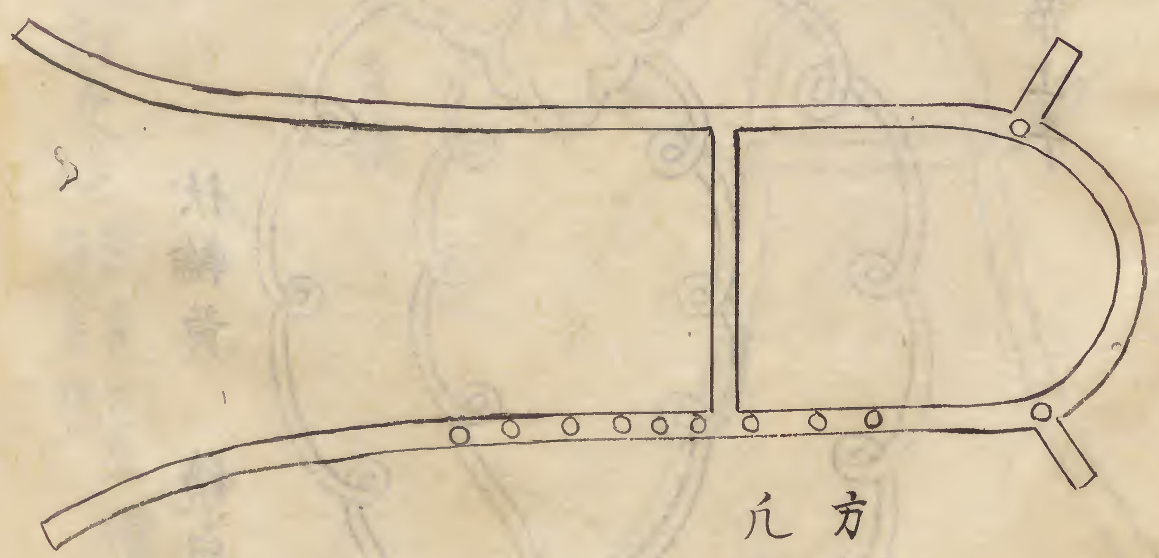
金銅



○鞦

赤滑或朱漆
付杏葉

鞦廣一寸四分
两方長四尺三寸
杏葉一方五 两方十



方金物一方九
凡两方十八

○杏葉

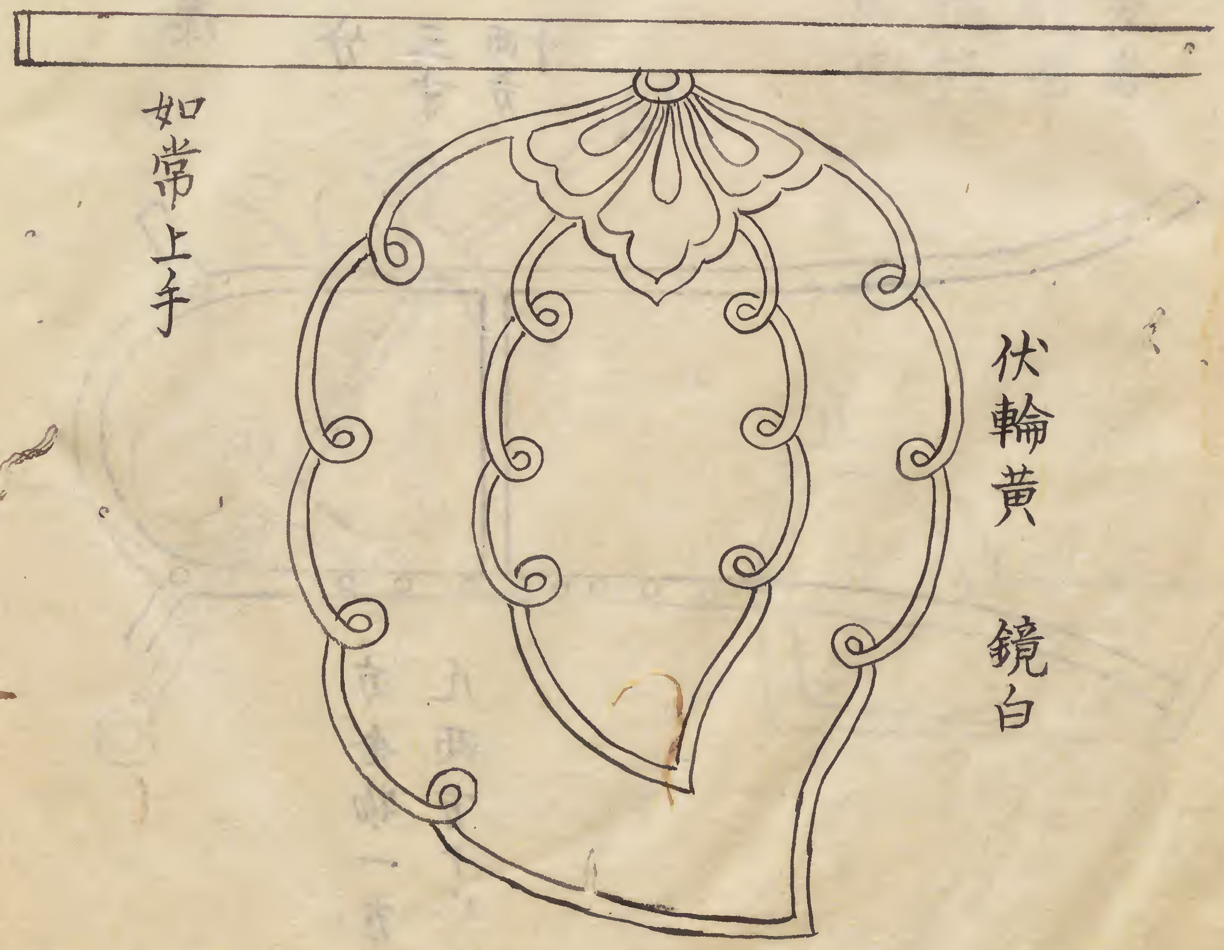
○胸懸

七尺一寸

廣如尻懸

杏葉五

方金物九

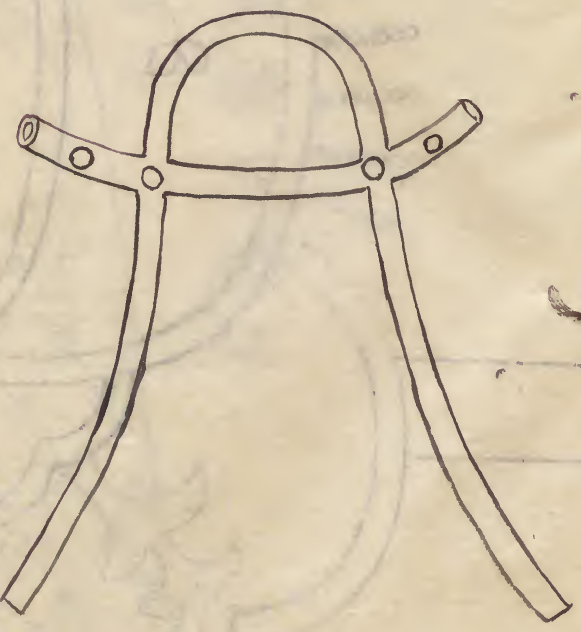


○面懸

立二尺廣一寸

横加紐定三尺九寸

方金物六



○手綱

蘘芳緂如常四位已下青緂

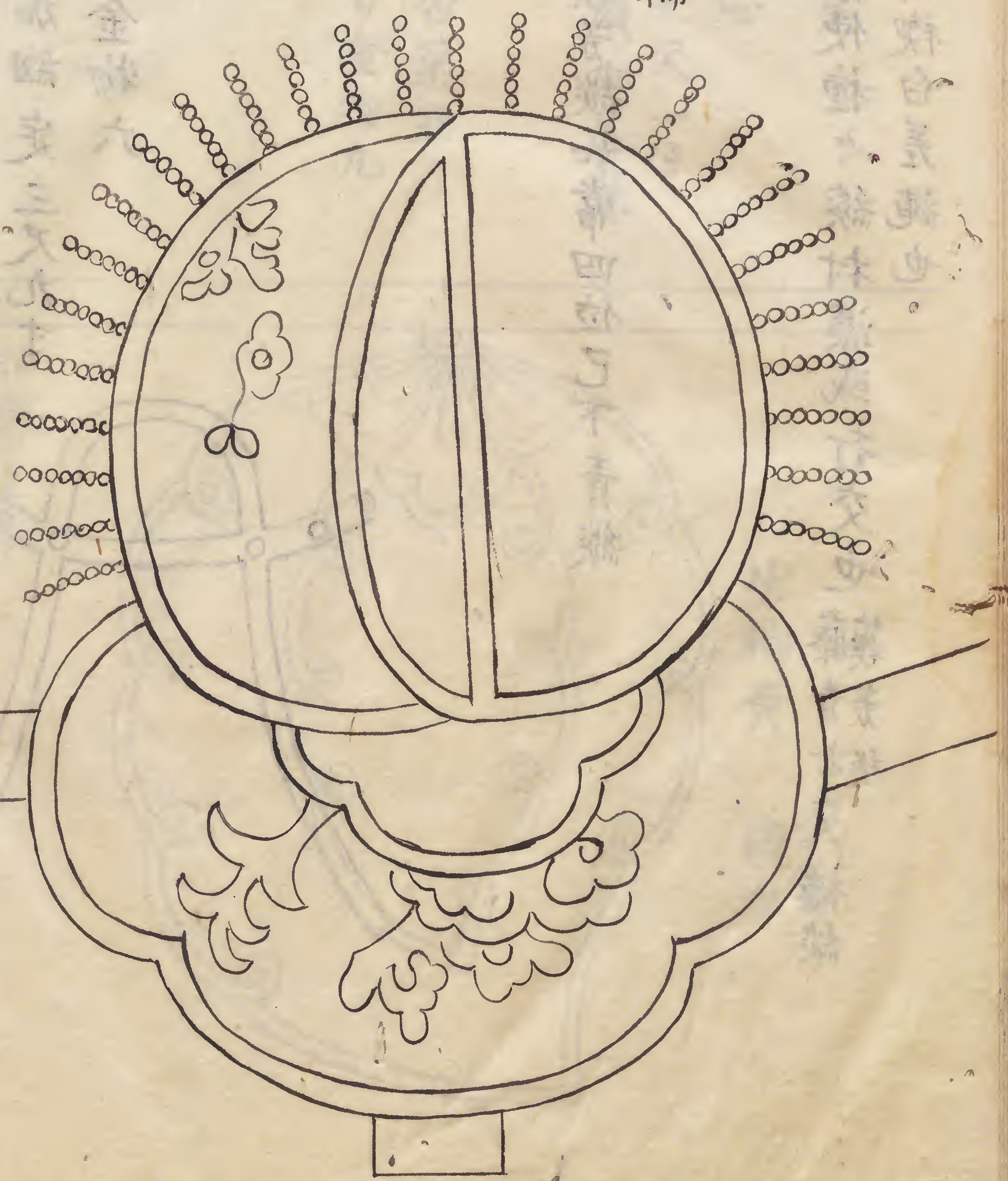
○差縄

絛使種々緂村濃或打交也 藤青打交 櫨緂 蘘芳緂

御禊白差縄也

○雲珠

有伏輪
上透
唐草
下鏡

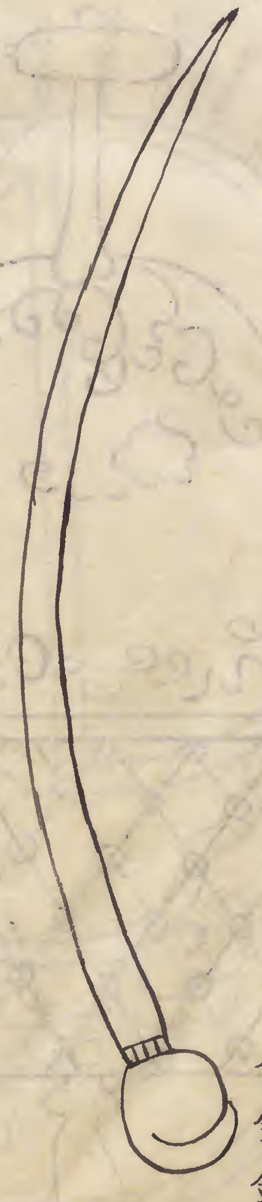


○頸総

鉢透物中ニ有大鈴下瓔珞、

○八子

両方六筋
已上十二
ニヲデノモトニ付云云 或記モツケト記



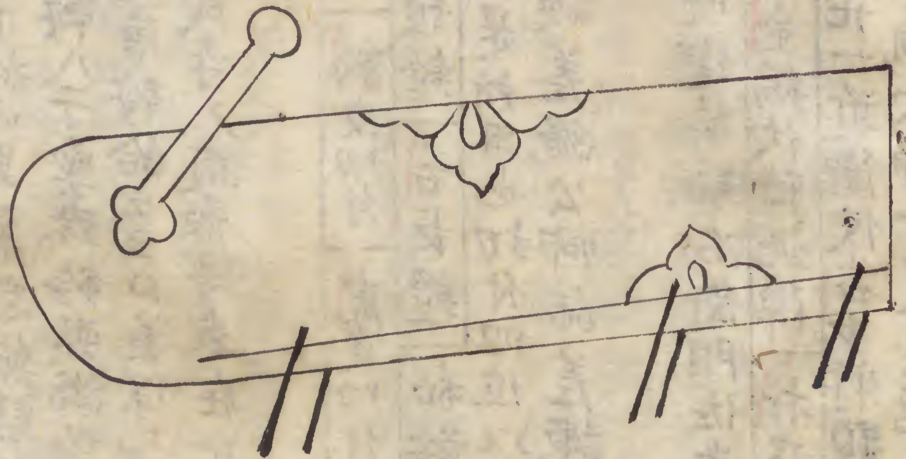
金銅鈴

嘉禎二年四月廿三日 祭通成朝臣使節借請入道
相國唐鞍八子無鈴

○鞍覆 如常

○銀面
私曰銀面可圖也

○尾嚢
長一尺二寸



鏡鞍

唐鞍
錺馬
菖蒲形銀面
頸総
杏葉
雲珠
尾袋
八子
鈴

長元九御禊公卿及節下少納言錺馬 銀面尾袋頸総 雲珠杏葉皆具 ○治暦元御禊諸卿
以上皆乗錺馬 菖蒲形銀面唐鞍杏葉 雲珠頸総如常 ○保安御禊摂政鏡鞍杏葉引下

赤銅○天仁或記曰殿下騎馬給間御領突當菖蒲形ニ給フ人々称ス危ト自今以後
可用意事○永治元御禊宇治丞相節下彼日記曰鹿毛馬自入道殿下給先
日雖尋求敢無被餝馬只有葦毛被餝俗人説不餝葦毛馬仍似浄飯王也
仍餝葦毛否欲申入道殿之間昨日下給此馬柔悪無驍氣向車差笠更
以不驚今朝置唐鞍予先乗試唐鞍八子雲珠鈴頸総也自入道殿修理
下給摂政本自騎馬支度之時令用此唐鞍給云云○兼保元節下大臣土御
馬河原毛字瘇川唐鞍杏葉具従法成寺入道殿傳來在左大臣家云云今
所借遣也

和鞍 縁螺鈿鞍 鏡鞍 蒔繪鞍 豹皮切付 虎皮切付 蕤芳緂手綱
棟緂手綱 師差縄 片差縄 舌短鐙 舌長鐙 和鞍 行幸ニ可用縁螺
鈿云云雖然近代或鏡鞍或蒔繪鞍彼是所用也切付四位以上豹皮五位以下
虎皮手綱公卿蕤芳緂四位以下棟緂差縄公卿師差縄四位已下片差縄
行幸ニ舌短鐙御幸ニ舌長鐙

泥障 泥障伏輪事保元元四十一御禊前駈右衛門佐光宗泥障有伏輪

鏡鞍 𦉪末濃鞦 𦉪村濃鞦 金銅伏輪泥障 打交差縄 有蘂総

青紗鞍覆 条使引馬鞍治兼三四廿一近衛使右少將顕家引馬鏡鞍
鞦𦉪末濃鞦同村濃 不滲交 青色 泥障金銅伏輪打交差縄有蘂総尾銅懸

差縄蘂

青紗鞍覆有縫物

蒔繪螺鈿鞍 虎皮切付 泥障 小総鞦 𦉪滲手綱 縁螺鈿鞍
葦鹿切付 楚鞦 棟緂手綱 大嘗會御禊女御代前駈鞍事永治
元十御禊前駈廿人五位十六人蒔繪螺鈿鞍虎皮切付泥障小総鞦𦉪
滲手綱六位四人縁螺鈿鞍葦鹿切付泥障楚鞦棟緂手綱

楚鞦付杏葉 和鞍 結唐尾 仁安二九廿一殿記曰初齋宮入野宮
五位以上和鞍楚鞦付杏葉結唐尾

蕤芳緂手綱 連著鞦 大治三四十四初齋院御禊別當有賢用蕤
芳緂手綱并連著鞦例欲可尋

和鞍用唐鞍鞦并付杏葉 仁平三九廿一或秘記ニ曰 兼長宮参野 和鞍ニ用唐鞍鞦并付杏葉ヲ

黒地螺鈿鞍 大滑 豹下鞍 連著鞦付杏葉 保安五九廿一初齋宮御
禊前駈中將宗能朝臣馬鹿毛黒地螺蜔鞍大滑下鞍豹切連着鞦付杏葉

和鞍付杏葉 和鞍用唐鞍鞦付杏葉 天養元九八西河御禊因幡守藤
原信輔長門守源師行越中守源資賢土佐守高階盛景各和鞍付杏葉
参議右近權中將經定和鞍ニ唐鞍ノ鞦付杏葉 ○貞丈按唐鞍ノ鞦ト云ハ即楚鞦ナリ 此支世俗浅深秘抄ニ見タリ

和鞍不付杏葉不結唐尾 治兼三四九初齋院入左近府給勅使参議左中將
定能朝臣和鞍不付杏葉不結唐尾左衛門權佐光長如此

舌長鐙
近代物

鍮𩋙（オモツラ）
無文鞍

鏡鞍縁有臥組 公卿将諸社行幸久安五十十一日吉行幸三位中将兼長
鏡鞍有縁臥組已上禅閤賜之
鏡地鞍縁堀物 舌長鐙 豹切付 連著鞦 䕌芳緂手綱 保安五二十御馬
栗毛鏡地鞍但縁堀物舌長鐙近代物也豹切付不竹豹連著鞦䕌芳緂手綱等也
螺鈿鞍 沃懸鞍 葦鹿切付 浅黄手綱 無文韉大滑 移鞍 赤手綱
壷鐙 縁螺鈿鞍 諒闇鞍事保元元十二十七御方違行幸或秘記曰鞍
螺鈿或沃懸也 葦鹿切付浅黄手綱無文草大滑等云云然而余今夜付事ノ
安ニ用移中略 藻壁門院諒闇中日中法勝寺御八講御幸面々人々所為
不同或借用太夫尉騎馬鞍 赤手綱壷鐙云云 或縁螺鈿或潛通鞍云云
鏡鞍 鏡鐙 鏡轡 豹韉 䕌芳緂手綱 泥障 嘉保二四十七江記
曰美作守自此宅出立鞍右大将被借橋鐙並ニ鏡也又韉豹 其轡又鏡
也只水付散物也手綱 䕌芳緂私儲之 泥障新裁也
移鞍 平文移 錦心上敷 大滑 鐙 轡 手綱 鞦 差縄 葦津緒
無文鞍 白差縄 鞦覆 移レ近衛次将乗用平文移或銀或摺貝入玉或入有錦或押薄文
心ノ上敷ニ大滑 縁用錦付金文堅食大滑畫ニ雲龍等ヲ 鐙或入銀或ハ押ニ薄文ヲ 轡或平文或金銅 手綱有ニ伏組ニ 䕌芳平絹 韉
平文付堅食 金物鍮金物 差縄或葦津緒或藤或棟或打交 舊例左右次将各一人用寮移近
代面々新調用之宿老次将或乗和鞍次将等夜行幸用無文鞍云々

蒔繪鞭
藤巻鞭
鞭指様
平礼

古今鞦大小長短

山槐記
吉部秘訓
古事談ニモ
平礼見タリ
山槐記ニテ
平礼明ニ知
タリ

甚不可然事歟 仁平元十七三臨時祭舞人隆長中将 乗平文移禅閤
調之 白差縄 ○首書云平文移ノ鞍覆無所見但打覆無難也
鞭 乗和鞍之時用蒔繪鞭用平文之鞍時猶用蒔繪無難也舞人用
藤巻鞭駈馬故也打任テハ鞭今ニ指ニ舍人腰ニ而平礼出ニ衣舍人令ニ指ニ狩衣ノ
頸紙ニ高官高位之人強依不持鞭如此也浅位之人尤自可持仍無此儀歟
可尋
鞦 古鞦チイサク総短シ近代鞦甚大総長四條納言隆親毋儀三品八
十嶋勅使ノ時為藏人頭直衣出衣令張ロヲ彼時鞦付ニ金物ニ故松殿入
道見物曰鞦金物有打所云云若过可打欲一向今按也可尋
鷲尾胡簶 鷹羽胡簶 府随身帯ニ鷲尾胡簶ヲ切文 可負鷹羽胡簶也
○貞丈云鷲尾ハギタル矢鷹羽ハギタル矢ヲ盛リタル胡簶ヲ云ナリ
紫檀地村螺鈿劔 頭書康平三四十二十二土御門ノ齋院入ニ紫野ニ新大
納言師實勤仕前駈ニ紫檀地村螺鈿ノ中ニ鴛鴦ヲ飛ス鮫柄云云
平礼烏帽子 平礼事或書雖中少将備ニ威儀ニ日多ク平礼公保卿少
将二十許ニテ常事也基家光能十及四近代其両人外近将不見及
基家又好此事ム ○貞丈按東鑑ニ所々ニ平礼見タリ土師聊トガ東鑑ノ訓点ニ平礼ニ ヒレトカナヲ付タリ此カナ付故実ヲ知テ付タル也平礼ヲヘイレイ又ヘイラ
イナドヽヨムハ俗ヨミナリ平ノ字ヒラトヨムニ礼ノ字ヲ添テ二字ヲ引合テヒレトヨムナリ ヒレト云フハ
ヒラメク了也裝束ニ比礼裙帯ノ比礼モ奥ノ鰭モ皆ヒラメクユヘノ名也烏帽子古代ハ堅クヌリ固メ叉

柔ナリシヿ續世継物語ニ見タリヤハラカナルユヘイカヤウニモ折ラルヽ也折テカブレバヱボシノサキヒラメクナリ
サレバソレヲヒレト云也古画ニ烏帽子ノ頂ヲ折リフセテカユルノタル体多ク見タリ是皆ヒレナリ今ノ風折モ
ヒレノ躰ナリ地下人ノカブル侍ヱボシノ事ノミヲ平礼ト覚タル人モアリ侍ヱボシニ限ラヌヿナリ既ニ錆折
ニ中少将平礼ヲ用ユ古事談ニモ堀川殿平礼ノ烏帽子ヲ宰相中将信道ニ給リシヿ見タリ侍ヱボシモ古代ハ
ヤハラカナル立ヱボシヲ折フセテヒラメキタルユヘ平礼ナリ品コソカハレ折テヒレヲ作リタルハ皆平礼ナリ平礼ト
云フ字ニツキテ平人ノ礼服ナルユヘ平礼ト云ト云説ハ附會也用ベカラズ山槐記ヲ見ヘシ○右ニ云ヒレ土師聯ト
云人ハ惺窩先生ノ弟子ナリ羅山文集ニ見タリ惺窩ハ冷泉家也公家ノ故実知リタル人ナルヘシ平礼ニ
ヒレト訓ヲ付シヿモ惺窩ノ教ヲ承シナルヘシ

国立公文書館
National Archives of Japan